

書評：森本淳生・鳥山定嗣編『愛のディスクール：ヴァレリー「恋愛書簡」の詩学』

安永，愛
静岡大学人文社会科学部：教授

<https://doi.org/10.15017/4355463>

出版情報：Stella. 39, pp.239-248, 2020-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

《書評》

森本淳生・鳥山定嗣編『愛のディスクール ——ヴァレリー「恋愛書簡」の詩学』

安 永 愛

本書は2019年12月21日に京都大学人文科学研究所で開催されたシンポジウム「愛のディスクール——ポール・ヴァレリー「恋愛書簡」を読む」の成果論文集であり、シンポジウムにおける5つの発表にくわえ、ヴァレリーの全体像のなかに「恋愛書簡」を位置づけた森本淳生氏の「序」と、ヴァレリーの生涯における女性たちとの交情をコンパクトにまとめた鳥山定嗣氏の「ヴァレリーと女性たち」が収録されている（水声社、2020年3月刊）。清水徹『ヴァレリー 知性と感性の相剋』（岩波新書）から10年を経て、エロスを鍵として新たな論点を提示し、本邦におけるヴァレリー理解をさらにいっそう深めることが目指されている。

第三共和政期を代表する詩人・知識人であるポール・ヴァレリーをめぐっては、「純粹自我」を研ぎ澄ます「知性の人」といった紋切型が長らく流通してきた。しかし、ヴァレリーと女性の関係にまつわる書簡や数々のテキストが明るみになり、また2008年にミシェル・ジャルティによる画期的なヴァレリー評伝（Michel JARRETY, *Paul Valéry*, Fayard, 2008）が公刊されるにおよび、エロスに翻弄された人としての側面、知性とエロスの相剋というヴァレリーの生の主導テーマが改めて浮かび上がってきている。そうした状況を踏まえ編者である森本淳生氏は「序」において、「知性の人」ヴァレリーの生の根本にある「方法」の追求とその方向性について概略を示し、彼の知的思索をエロスに対する一種の防衛機制と見なせるとの仮説を提示し、ヴァレリーの恋愛書簡を繙く意義について触れている。もうひとりの編者である鳥山定嗣氏は、ヴァレリーと女性との関係、女性との交際と作品創造の関連についての来歴を「ヴァレリーと女性たち」と題してバランスよくまとめている。17歳の頃に出会った19も

年上の未亡人ロヴィラ夫人，そして長編詩「若きパルク」の成功で一躍文壇の寵児となってから数年後に会ったカトリーヌ・ボッジ，60代にして出会った30代の美貌の彫刻家ヴォーチエ，そして最後の愛人となる32歳年下のジャン・ヴォワリエ。ロマネスクでもあるヴァレリーの歴代の恋人たちが召喚されている。

これに続く5つの論考で，ヴァレリーと女性との力動的な関係性と，そこから紡がれていく思考や感性に光が当てられる。

まず，今井勉氏の論考「抽斗にしまった手紙——ロヴィラ夫人問題を考える」は，フランス国立図書館所蔵の「ド・ロヴィラ夫人関連資料」の精密な読解に基づき，若きヴァレリーが年上の貴婦人に寄せる恋慕とその苦悩，そして恋文が文学化していく様相を明らかにしている。

大学1年次の試験終了後，夕方海水浴に出かけたヴァレリーは，ひとりの夫人に出会う。「何世代にもわたる贅沢と安楽，躰とサロン教育，貴族教育の賜物」である夫人の姿に魅せられ，青年の胸中に夫人の面影が住み着く。モンパリエの街中で夫人を目にしては心ときめかせ，ヴァレリーは読まれるあてのない恋文を書き綴るようになる。一言も言葉を交わしたことのない夫人に一方的に思いを募らせ，教会のミサで目にしたその夫人のうなじに魅了されるとともに，その眼差しを「メドゥーサ」と感じ，呪縛されてしまうヴァレリー。まことに初心な青年の心の揺れである。有徳の年上の貴婦人へのプラトニックな思いを秘めることで精神的に鍛えられ一人前になっていくとする，不可思議といえれば不可思議な騎士道の伝統に連なっているようにも見える。

ヴァレリーは夫人に対し，いっさい行動に踏み切ることはできないが，恋文の推敲は重ねられていく。夫人に手向けられるべき「言葉の花束」は「ひとり小説」として熟成していく。夫人の相貌がヴィーナスやプシュケ，メドゥーサといった神話的形象と重ね合わされ，「ひとり小説」がこの上なき文学のエチュードの場と化していく様を今井氏は詳細に論じている。ロヴィラ夫人への恋文でのヴァレリーの文体は，ヴァレリー自身が嫌っていたミュッセの文体に皮肉にも近いとのユゲット・ローランティの評も紹介されているのだが，何より重要なのは，ヴァレリーが激しい恋愛を文学制作の積極的な契機，知的刺激剤であると捉えていたことである。今井氏は，ロヴィラ夫人の思い出について語るヴァレリーの「私にとって文学制作は，愛情と嫉妬の想像的な毒に対抗す

るひとつの方法である」というカイエの文章を引いている。ヴァレリーは恋愛という事態を全き受動性のなかで出会ってしまうものと捉えているのだが、ロヴィラ夫人への恋慕と苦悩、書き溜められた恋文は、のちのヴァレリーの生とエクリチュールを結ぶ力動性の母型となったと考えられるのである。その後、ヴァレリーが惚れ込むのは、いずれもヴァレリーを試練にかけるような傾向を持つ女性たちであった。自らを翻弄する力をも（をこそ）エクリチュールに昇華していくヴァレリーの若き日の原体験を今井氏の論考は鮮やかに蘇らせている。

ヴァレリーが生涯に出会った女性のなかでも、カトリーヌ・ポッジは、「試練にかける」という意味で、最も手強く、またヴァレリーに最も深い痕跡を残した女性であったのではないだろうか。松田浩則氏の論考「カリンとポールの物語——Ave atque Vale をめぐって」は、ヴァレリーとポッジという、いずれも強い自恃を持ち、飽くなき探究心を持った一組の男女の深淵へと測鉛を垂らす。パリ大学医学部教授の父、富裕な名家出身の母の元に生まれたポッジは、当時の上流階級の女性の例にもれず、公教育ではなく家庭教師について語学やピアノを習い、それだけでは飽き足らず、独学で古典語・哲学・神学・数学・諸科学を学んだ知的好奇心に満ちた女性である。ヴァレリーと出会ったとき、ポッジは、一児の母であり、劇作家である夫とは離婚調停中の身であった。

ポッジは自ら詩も書き、哲学的試論『自由について』を草し、一個の作家たるアイデンティティを持った女性である。1920年6月、パリのプラザ・アテネ・ホテルでルネ・ド・ブリモン男爵夫人の仲介で初めてふたりが出会ったとき、カルノーの熱力学第二法則やアインシュタインについて語り合い、ヴァレリーは発表したばかりの詩篇「海辺の墓地」をポッジの前で朗唱したという。

ヴァレリーはこの極めて高い知性を有する女性に、驚くほど自分に似たもの、自らと響き合うものを見出す。1920年9月にヴァレリーはドルドーニュ県ベルジュラック近郊にあるポッジ家の広大な領地ラ・グローレに招かれ、ふたりの仲は急速に深まり、この地で彼らは結ばれる。ヴァレリーはラ・グローレ滞在時、『カイエ』に「愛と絡みあった知力、あるいは知らぬ間に愛に取って代わってゆく知力なら、この初めて経験する惑乱から何かを作り出すことができる」という言葉を書きつけている。知的なものも存分に共有できる女性ポッジとの出会いが創造のエネルギーに転化していくことを早くもヴァレリーは予兆して

いる。一方ポッジはラ・グローレでヴァレリーとともに過ごした時間について「絶対的な結婚」「血と魂による驚異的な天国」との言葉を残している。1920年9月のラ・グローレでの日々はふたりにとってまさに至福の時間であった。

しかし、この「蜜月」は長くは続かない。ポッジはヴァレリーに全てを捧げるとともに、ヴァレリーにも全てを自分に捧げることを願う。そんなポッジは、彼女との出会いの後も社交界への出入りをやめずご婦人たちのお世辞に気分を良くし、盤石な家庭を維持し続けているヴァレリーを許すことができない。知性とエロスが渾然一体となった共同体をヴァレリーとの間で作り上げたと自負しているポッジは、ヴァレリーが穏やかな夫婦関係を維持していることがどうしても許せない。霊肉の両面でヴァレリーとの神秘的な合一を信じているからこそ、自分に「全面的な贈与」をしないヴァレリーに対し、ポッジの怒りは収まらない。ポッジは、ヴァレリーに出会ってから翌年の1921年にかけて発熱や出血が続く。それは結核ゆえだったのだが、ポッジはヴァレリーの子を身ごもったと信じていた。

こうした悲痛な関係性のなかでも、カトリーヌ・ポッジはヴァレリーとの愛を謳う詩を紡いでいく。「あなたが私にくれた大きな愛」の詩行で始まる彼女の詩「Vale」では「ひとつになった私たちふたりの存在の球体」が寿ことほがれるとともに、ふたつに分かたれる哀切さが迫ってくる。のちにカトリーヌは「Ave」と題した詩により地上的な愛に対置される「絶対者」としての「あなた」を刻もうとし、「あなた」にヴァレリーを重ねようとする巷間の読者の読みをカトリーヌは否定するのだが、カトリーヌがヴァレリーの愛の圏域から潔く離れたとはいえないことを、松田氏はカトリーヌの残した『日記』の数々の記述のなかに読み取っている。

『エウパリオス』『魂と舞踏』『神的なる事柄について』（未完）といったヴァレリーの一群の対話篇はカトリーヌ・ポッジとの出会いの高揚あってこそ書かれた作品であるが、松田氏の論考は、その「いと高き愛」のネガとしてのカトリーヌの生の悲劇を、彼女のテキストを精細に読み解くことにより余すことなく伝えていく。

続く鳥山論文「恋文を書くナルシス——「愛」の女性単数形をめぐる」は、ヴァレリーの恋愛書簡のなかに現れる、特殊な amour の用法に着目し、ヴァレリーの生涯のテーマである「ナルシス」の問題群と関連付けながら、ヴァレ

りの「愛のディスクール」の特徴を探ろうとするものである。

通常フランス語で「愛 amour」は男性名詞であるが、鳥山氏によれば、ヴァレリーの恋愛書簡やナルシスをめぐるテキストにはしばしば amour の女性単数形という例外的な用法が見られるという。『ロベール仏和大辞典』にも「文章語では複数形が女性名詞として扱われること」があり、「稀に古語あるいは俗語表現で単数形が女性名詞扱いされること」もあるとの記述が見られる。

鳥山氏は、ヴァレリーがポッジに送った手紙の記述から、ヴァレリーとポッジとの間で amour を女性単数形で用いる特殊用法がポッジと共有されていたであろうと推察している。ヴァレリーとポッジは女性単数形の「大いなる愛」という表現を交わし合い、目配せし合っているのである。フランス語の歴史を振り返るならば、女性形の amour の用例は「1660年まで無数」に存在したとの言語学者フェルディナン・ブリュノの指摘があり、鳥山氏はヴァレリーの用法を「アルカイズム」と捉える可能性も示唆しつつ、それだけではないと論じる。さらに、ナルシス詩篇を分析し、初期から晩年にかけて、女性単数形の「愛」の用法の頻度が増すことを指摘し、amour の女性単数形の使用がナルシスの自己愛を示す弁別的指標になっていることを突きとめている。ほかに、ナルシス的な自己愛に関わる単語「délice 悦び」などにも文法上の性を意図的に歪める例が見られることが指摘されている。

こうしたヴァレリーによる語の文法上の性の攪乱はナルシスの両性具有性の反映と見なすことができるのではないかとさらに踏み込んで鳥山氏は論じている。カトリーヌ・ポッジとの往復書簡のなかには、ポッジがヴァレリーに女性形で呼びかけたり、ヴァレリーがポッジに男女両性を兼ねたような性格の多様性を読み込んだりしている箇所が見られるという。

ヴァレリーの恋愛には、相手のなかに自分を映し見る、あるいは「ふたりでひとつになる」といった欲求が随伴している。自己に内在するアルター・エゴを外在する他者に求めるという奇妙といえは奇妙な欲求である。こうした欲求が生まれたのは、高度な知的レベルで共鳴し合えたカトリーヌ・ポッジとの関係が決定的であったと言えよう。自己と他者のナルシス的合一という理想と、鏡像関係の理想の破綻による悲惨と。ヴァレリーの愛はこの両極を行き来しているように思われる。こうしたヴァレリーの愛のありようは、最後の愛人であるジャン・ヴォワリエとの関係においても繰り返されている。彼女に捧げられ

た「ナルシス交声曲」にもその反映が見られると鳥山氏は指摘している。

ヴァレリーの恋愛書簡やナルシス詩篇に amour の語の女性単数形という例外的用法が散見するのは、容易に通約可能な言葉を「漠然とした大衆」に投げかける、というのではなく、ただ唯一の相手に向けて書くような私秘性が、逆説的に普遍へと繋がることをヴァレリーが信じていたためではないだろうか。鳥山氏の論考は、ヴァレリーにおける amour の語の例外的な女性単数形としての用法という一見トリビアな現象から出発しつつ、恋愛書簡のエクリチュールの特質、さらには芸術創造の秘訣としての書簡的エクリチュールの意義を示すに至っており、極めてスリリングである。

塚本昌則氏の論考「ヴァレリーと犯罪——カトリーヌ・ポッジと「奇妙な眼差し」の形成について」では、ヴァレリーが「人殺し」や「犯罪」「罪」といった激しく荒々しい語彙を用いるようになるのが、カトリーヌ・ポッジとの出会いの衝撃を直接反映した1920年以降のテキスト群においてであるとの着眼から、ヴァレリーがこれらの言葉を通して何を言わんとしていたのか、また、そのような言葉をヴァレリーに使用せしめるに至ったポッジ体験とはいかなるものであったのか、そうしたヴァレリーの精神のありようとはいかなるものであったのかが追究されている。

ポッジとの関係で特徴的なのは、ヴァレリーが求める異様な距離の近さであるが、そうした接近への幻想は往々にして幻滅に変わり、相手への憎しみに転化してしまうと塚本氏は指摘している。「犯罪」や「人殺し」「罪」といった語を要請するのは、相手との融合への強い思いの反転としてなのである。ヴァレリーとポッジの決裂を決定づけたのが、彼自身「呪われた1921年10月23日」と呼ぶ出来事で、日曜日の夕方にパリの定宿からリヨン駅に向かうタクシーに同乗してほしいとのポッジの願いを、家族の夕食に間に合わないからという理由で受け入れなかったヴァレリーにポッジが立腹し「二度とお目にかかりません」と告げたという一件である。

些細なすれ違いに過ぎないようにも思われた一件ではあったが、その後ヴァレリーが何度手紙を書こうとも、ポッジからの返信はなく、ヴァレリーは絶望に沈む。こうした愛憎の劇のなかでヴァレリーは、犯罪というものを人間の本性に根ざしたものだとし繰り返すことになるのである。さらに、この一件は、ヴァレリーの死の直前に最終版の日付が打たれることになる散文詩「天使」の

前駆テキストが書かれる契機ともなったことを塚本氏は指摘している。この散文詩の初出形態においては、「天使」の最終版では消去されることになる「奇妙な犯罪者」への言及が含まれているという。散文詩「天使」は「天使のようなものとある泉のほとりに座っていた。天使は泉のなかの自分を見つめ、自分が人間であること、そして涙を流しているのを見た」という印象的なフレーズで始まるが、初出形態の第3段落目には次のように記されていたのである——「そしてひとりの犯罪者も、どこか別の泉、あるいは同じ泉のなかにある自分を見つめていた。人びとが話しているあのすべての犯罪を、いったい誰が犯したのだろうか。私には犯罪者の姿は見えない。この男は優しい様子をしているようにみえる」。

塚本氏は、天使とともに犯罪者をひとつの散文詩に書き込んだヴァレリーの仕儀に、ポッジとの出会いを介して生まれることになった強い融合への思いと、その願いが反転したかのような、世界から遠ざかろうとする精神の激越な動きを看取している——「事物に対する奇妙な眼差し。見分けることがなく、この世の外にあって、存在と非＝存在の間に目を据えている人間の眼差し——それは思考する人のものだ。それはまた死に瀕した人の眼差し、認識を失いつつある人の眼差しでもある」。このような言葉を「呪われた1921年10月23日」からまもなくしてヴァレリーは書きつけているのである。

ポッジとの恋愛は、ヴァレリーのなかの何ものかを無化するような、存在を切り崩すような激越さを帯びていた。ヴァレリーは、ポッジと初めて結ばれたラ・グローレの庭を彷彿させる庭の灌木の根元におびただしい数の死んだ蛇が並べられているという不気味な夢を『カイエ』に書き留めている。夢と犯罪とは共に、ある「仮定的な要素」を日常に導入することで新たな生をたちまちのうちに構築してしまう力を秘めているものとヴァレリーには映っていたという。

「思考する人」のものである「奇妙な眼差し」は「傲慢さ」と不可分である。自分を無に帰するかのような圧倒的な外部の力との接触において、初めて十全たる意味を備給されるような側面が、ヴァレリーの殊に抽象的な言説のなかには存在する。自己でさえ、様々な認識や感情が行き交う一個の劇場としてみなしてしまうような、世界からの激しい乖離の様相がヴァレリーの思考と感性にはある。そうした乖離の力は、一種の「傲慢さ」、キリスト教の枠内にあっては七大罪として非難される「傲慢」さからしか生まれえないものである。その傲慢

さは、ヴァレリーのエクリチュールに向かうエネルギーの根源でもあった。このように塚本氏は、ヴァレリーのポッジへの愛憎が、強靱なエクリチュールや、透徹した認識への情熱に向かう触媒として働いた、その力動性を見事に浮かび上がらせている。

本書の最後に置かれた論考は、編者でもある森本淳生氏の「愛のエクリチュールと「不可能な文学」——マラルメ、恋愛書簡、〈私〉の回想録」。森本氏は同論考において、ポッジとの別離後に会った女性彫刻家ルネ・ヴォーチエ、そして最後の愛人となるジャン・ヴォワリエとの交情に照準を当てている。ヴァレリーの胸像を製作することになった若き美貌の彫刻家ヴォーチエへの恋愛は、ほぼヴァレリーの片思いに近いものであった。ヴァレリーからヴォーチエに宛てた一連の書簡は『ネエールへの手紙』(Paul VALÉRY, *Lettres à Nèère*, La Coopérative, 2017) としてミシェル・ジャルティの校訂により公刊されているが(ネエール Nèère はルネ Renée のアナグラムでありヴォーチエの愛称)、ヴォーチエからの書簡は残されていない。ヴァレリーの恋愛書簡は自らが築き上げた「システム」が破綻する瀬戸際に紡ぎ出される、と森本氏は指摘する。ヴォーチエ宛も、ヴォワリエ宛も、ヴァレリーの恋愛書簡においては相手の「不在」が主題化されると共に、成就しない愛の経験により、決して完成しない作品、「不可能な文学」と自身主題化している問題系が引き寄せられていると、重ねて森本氏は述べている。

そもそもヴァレリーの晩年の諸作品の背後には、常に女性たちの存在があったが、恋愛書簡で展開されているのは、決して公刊に至ることのない、現実世界のなかでは実現し得ないまでに崇高化された何かなのである。森本氏はそうした恋愛書簡の位相が、1942年頃に執筆された未完の、そして最後のマラルメ論「至高の事柄と精神的の情熱に関する小論——S・マラルメについての省察と問い」と響き合うものであることを跡付けていく。ヴァレリーは同論において自らの「知的回想録」を書くのだとの宣言を行っているのだが、特にヴォワリエに宛てた書簡のなかでは、「知性という偶像」を戴き「テスト氏」の如くエロスを抑圧した若き日を振り返り、そうした「知性の鋭敏な武器」による愛の抑圧の試みが破綻した現在が告白され、「通常の文学作品とは異なる作品、愛するふたりが作り出す作品」の夢が語られることになるのである。さらには「不可能な作品」という理想は、「否定神学的な装いのもとで叙述されていく」こと

となる。

ヴァレリーの恋愛書簡は、ヴァレリーのエロス体験の単なる記録にとどまるものではなく、マラルメ論と知的回想録に記された、文学を超え出るようなヴァレリー自身の文学的営為全体と共振するものである、というのが、森本氏の論考の結論である。「文学」を「書物」を最終的な偶像としたマラルメと、そのような道は取らなかったヴァレリーと。その差異は、ヴァレリーの恋愛書簡にも反映されている。文学をも精神の諸能力の一例として包含してしまおうとのヴァレリーの野心は「不可能な文学」という虚焦点に結ばれるのである。森本氏の論考は、ヴァレリーにおける生とエクリチュールの連関についての俯瞰図を示していると言えるだろう。

*

以上は、この論集に沿っての内在的な紹介であり批評である。しかし書評者は、本論集の編者や執筆者が意図したことだろうこととは別の観点から、本書についてのささやかな考察を最後に加えておくこととしたい。

2019年暮れの「愛のディスクール——ポール・ヴァレリー「恋愛書簡」を読む」のシンポジウムから時を空けず2020年3月には本書が刊行され、コロナ禍によりイベントというイベントがキャンセルされるなか、日本ヴァレリー研究会では9月に早速オンラインでの本書の合評会が開催された。博士論文をベースにした研究書『ヴァレリーの芸術哲学、あるいは身体の解剖』（水声社、2013年）を上梓後、研究のフィールドを様々な障害を持つ人々の現場へと広げ、研究の新境地を開拓し幅広い活躍で刮目される美学者の伊藤亜紗氏も評者として本書の合評会に参加された。伊藤氏は、ヴァレリー研究者として、戸惑いを覚えると率直に述べられた。ヴァレリーと女性たちとの間にある関係の絶対的な非対称性、つまりヴァレリーが圧倒的に優位な位置に立っていることに触れ、ヴァレリーは女性（ことに結核を患い、病弱でありながら、全てをなげうってヴァレリーを愛したカトリーヌ・ポッジ）の痛みを本当に感じていたのだろうか、との根本的な疑念を呈されたのである。

創造するヴァレリー、知性とエロスのはざまにあって、生とエクリチュールとを高度に紡ぎ合わせていくヴァレリーに我々は魅了される。しかし、そのヴァレリーに、女性を自らの思索や感性を開発するための「肥やし」とするよ

うな構えが潜んでいるとしたら、そこに倫理的な問題は孕まれていないと言えるのだろうか、という痛烈な問いかけである。合評会に参加していた各執筆者にとっても、虚を突かれる問いであったと見受けられた。書評者自身、ヴァレリーが次男フランソワに送った一連の書簡をフランス国立図書館草稿部で読み小論を草したこともあり、寛容で快活な良き父として振る舞いながら、同時期に不倫関係が深まっていることをどのように捉えたら良いのか戸惑いを覚えていたところであった。盤石な家庭を維持しつつ、なぜヴァレリーは恋愛にエネルギーを注ぎ、そこからエクリチュールに向かうことができたのか、と合評会にて筆者が問うたところ、松田浩則氏は「ヴァレリーには時間割があったから」と即答された。ヴァレリーは家族の時間と愛人との時間を峻別しており、それぞれ懸命に役割を務めていたということだろうか。

カトリーヌ・ポッジがヴァレリーの妻ジャンニーに、関係を暴露するという修羅場もあったことがわかっている。夫人は、不倫に走る夫、恋愛と創造が不可分に結びつくという業を背負った夫を、さらに大きな包容力で受け止めていたのではないか。互いの精神をどこまでも研ぎ澄ませていくかのような激しい恋愛も、実は家庭の安寧が確保されていればこそ可能であったとも考えられる。結婚はあくまで制度の側に属し、恋愛はその制度の外にある、といったフランス古来の流儀がヴァレリーにおいても繰り返されていると言うこともできる。とはいえ夫婦の情愛の有難さをヴァレリーは知らなかったはずはないだろう。カトリーヌ・ポッジを激怒させたという「テスト氏」連作の一編「エミリー夫人の手紙」には、知性や感性を研ぎ澄ましあう関係性とは全く違った、互いに愚かになれることの幸福、理解はできない部分も含めて丸ごと相手を受け入れることの幸福のようなものが、「神なき神秘家」と夫を名指すエミリー夫人の声を介し、比類のない美しさで描き出されているからである。

ジェンダーの平等を旨とする現代のポリティカル・コレクトネスの観点からは捉えきれない部分がヴァレリーにはある。本書を繙くことにより、読者はヴァレリーの恋愛への狂気に半ば呆然としつつも、人間の精神の孕みうる振幅の大きさ、善悪の彼岸を垣間見るような赤裸々な生の実相、その凄みを知るようになるだろう。編者・執筆者の克明なる探究に改めて敬意を表したい。